追悼　坂本勉先生

久保智之

坂本勉（さかもとつとむ）先生（言語学・応用言語学研究室 教授）は、2014（平成 26）年 7 月 23 日、60 歳で膵臓がんのため逝去なさいました。

坂本先生は、1992 年 10 月に、同年 4 月に設置された応用言語学講座の助教授として、神戸松蔭女子学院大学より赴任なさいました。以後、心理言語学、言語理解研究、ソシュールの言語理論、言語学概論などを講じると共に、「坂本組」と称される愉快な指導学生の集団を率いて、心理言語学の研究に邁進なさいました。坂本先生は、日本の心理言語学の開拓者です。ヒトが言語を理解するプロセスを、反応時間（文を見たり聞いたりしてからの時間）や、脳波を見ることで研究なさっていました。

ヒトの脳内では、様々な部位で微弱な電気的反応が起こります。言語を理解する時に観察される脳波（これは事象関連電位と呼ばれます）を観察し、言語理解とどう関連するかを、坂本先生は研究なさいました。例えば、「柔らかい色」のように、異なる感覚モダリティ（「柔らかい＝触覚」+「色＝視覚」）に属する語を組み合わせた表現では、その組み合わせに制限があることが知られています。同じ、触覚と視覚の 2 者の組み合わせでも、「赤い手触り」のように「視覚＋触覚」の組み合わせだと、途端に変な日本語になってしまうのです。坂本先生は、この「変さ」がどう脳波に現れるかを研究なさいました。「柔らかい色」でも「赤い手触り」でも、N400 という脳波が観察されます。N400 は、事象が起こってから（例えば「柔らかい」のあとに「色」という名詞が被験者に呈示されてから）400 ミリ秒（0.4 秒）後に観察される陰性の電圧変位です。この脳波が観察される頭皮上の部位が、「柔らかい色」では脳全体なのに対し、「赤い手触り」では右脳に限られることを、坂本先生は解明なさいました。我々が変な日本語だと感じるその「変さ」が、脳波 N400 の頭皮上の分布の違いに対応していることを指摘なさったのでした。まことに重要な研究であると言えます。

坂本先生は、音を持たない要素（空範疇と呼ばれる）の心理言語学的研究もなさいました。（ア）「太郎が花子に喫茶店で東京へ行くことを依頼した」で

は、「＜花子が＞東京へ行く」と解釈されます。他方、（イ）「太郎が花子に喫茶店で東京へ行くことを告白した」では、「＜太郎が＞東京へ行く」と解釈されます。どちらの文でも、誰が東京へ行くかは明示されていません（＜＞内の要素が現れていません）。坂本先生は、テープにこれらの例文を録音して被験者に聞かせ、「東京へ行く」の主語を答えさせて、回答に要する反応時間と正答率を調べました。正答率の差はなかったのですが、（ア）の方が有意に反応時間が短いという結果になりました。これはなぜでしょうか。坂本先生の主張は、「日本語話者は、「＜花子が＞東京へ行く」と予測して解析を進めている。しかし（イ）のように、最後の動詞が「告白した」だと、その予測に反する（「東京へ行く」主語と「告白した」主語が一致することが必要になる）ので反応時間が長くなるのだ」というものでした。「に格」で表示された名詞（この例では「花子」）が優先的に埋め込み文（この例では「東京へ行くこと」）の主語になるという主張です（因みに、「花子に太郎が。。。」と語順を入れ替えても、同様に反応時間の差が観察されます）。文の解析における文法的情報の役割を指摘した点で、まことに重要な研究だと言えます。

長崎県の大村湾で育った坂本先生は、京都大学で言語学を学び（御本人おっしゃる「えせ関西弁」も学びました）、「比喩の理解」に関する研究を始め、その後ニューヨーク市立大学で心理言語学の本格的な研究に着手なさいました。神戸を経て九州に戻ってからは、研究はもちろんですが、良き釣りの師匠に恵まれ、玄界灘の釣果で研究室の客人をもてなすことが常でした。前日が時化の場合でも冷凍物が出て来ます。いつの間にか、大学院生の中に魚の調理人も養成されていました。

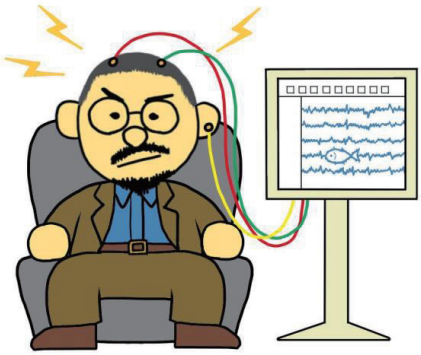
2013年の2月ごろだったでしょうか､膵臓がんが見つかったことを我々に淡々とお話になりました。4月に手術をなさり、順調に快復なさることを一同信じておりました。お見舞いに伺うと、タブレット端末を使って淡々と御自分の病状を説明なさいます（「ここがこうなっとるんですわー」みたいな）。そして、あの人なつこい笑顔でエレベーターまで見送ってくださいました。2014年2月には皆で還暦のお祝いをし、4月には普通に授業もお始めになったのですが、5月の連休前から体調を崩され、ついに帰天なさったのでした。御遺骨は、坂本先生お気に入りの釣りのスポットである玄海灘の玄海島付近に散骨されたと聞きます。「これからは毎日釣り三昧です」と、散骨の見送りに伺ったとき、姪の浜で奥様が明るくおっしゃっていたのを思い出します。

坂本勉先生の御冥福をお祈りするとともに、「やってみなはれ」精神を受け継いだ「坂本組」の学生諸君や卒業生の皆さんが、自由闊達に成長して行くことを願うばかりです。我々残されたスタッフも、あまり悲しみすぎることなく、

坂本先生の明るさを受け継ぎ、言語学研究室をしっかり運営して行きたいと思います。

勉（べン）ちゃん、有り難う。しばしのお別れです。

（この文章と下のイラストは、『会報 58』（九州大学文学部同窓会、2015 年 3 月）に掲載したものであることをお断りします。）



「坂本勉先生の脳波を計る」（坂本組 立山憂（ゆうき） 描画）